

第４回：国際耕種と NGO—ジンバブエでの取り組み

我々がジンバブエで独自に実施しているプロジェクト形成調査について具体的に動き始めたのは、1997年からで、国内において英語圏・アフリカ地域に限定した NGO の活動実績調査、資料収集を行った。次に、その中から将来一緒にプロジェクトを行っていく現地 NGO を選定するために、1998年には2回にわたり現地調査を実施した。その2回目の現地調査においては2、3の現地 NGO を選定し、選定する上では次のポイントを重視することとした。

- ・ プロジェクトの内容、対象地域、相手側の反応（やる気）
- ・ 農業や村落開発を実施している
- ・ 持続可能性・環境保全・住民参加などを重視かつ実際に現場を持って活動している
- ・ 地域に根ざした活動を目指していてなおかつ実際に現場を持っている組織：いわゆる CBO(Community-Based Organization)である

キーワードとしては、住民参加、適正技術、スモールスケール（あるいは適正規模）持続性といった言葉が挙げられよう。そして1999年には、連携対象として選定した NGO に対してプロジェクトの内容や現地側の意向をより詳しく調査するため、実際の活動に同行し日常の活動の様子をうかがった。今回対象として選んだ NGO は、主として農林業や村落開発を担当している組織であるが、そのひとつを紹介する。

「Zvishavane Water Project（以下 ZWP）」

連携の相手として選んだ理由は、組織の規模の小ささと、相手側にやる気みられる、等々。また、我々のこれまでの経験から考えて、ZWP のプロジェクトの内容に Water Harvest（基本的には雨水を集めて有効に利用する手法。乾燥地・半乾燥地を中心に発達してきた伝統技術。）を含んでいたり、活動地域が半乾燥地域（Natural Region・～に属する）に属している等も大きな理由である。

彼らは、ジンバブエ中南部の Zvishavane 及び Chivi エリアにおける地域住民の生活向上を目的とした集水並びに土壌保全活動への参加型活動を実施している。実際の活動として、中・小規模ダム建設、コミュニティグループガーデンへの支援及び小規模灌漑、雨水の集水と利用、養魚、家畜飼育、水土保全等の活動をスタッフ十数名と共に行っている。雨水の集水・利用、土壌保全により地域住民の生産活動を持続性のあるものに変え、ここ半乾燥地域で培われた伝統技術にも目を向けている。

設立は1987年で、篤農家（一般には熱心で研究的な農業者を指すが、ジンバブエでは特に独立以前から様々なアイデアを用いて前衛的な農業を行う人々をいう。）と言われる人が始めた活動が基礎となっており、地域の中で井戸の設置やダム建設を行い、現在の NGO の形になっている。活動領域が狭いこともあるが、普段からスタッフが直接住民と接する機会も多く極めて地域に根ざした地元密着型の典型的な CBO であるだけに興味深い。



ポンプを設置しコミュニティガーデン(野菜畑)に灌漑



村人によるダム建設



岩肌を利用した雨水集水施設
(後方の建物は小学校)

次回は、連携対象としたその他の NGO について紹介する。